

國學院大學學術情報リポジトリ

中国最古の博物館に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 哲, Zhang, Zhe メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000967

中国最古の博物館に関する一考察

張 哲

要旨

中国における博物館の濫觴は、フランス人宣教師ピエール・ウッドが一八六八年に設立した「徐家匯博物院」であると中国では一般的に認識されている。しかし、かかる認識が間違っていることについては、すでに中国の研究者によって実証されているにもかかわらず、未だ周知されていない。本稿ではこの点を再度明確にしたうえで、中国での博物館の濫觴を見出すことを目的とする。

第一章では、中日両国の博物館学における博物館機能の認識をすりあわせ、その機能と要素を新たに定義する。この定義を用いて、徐家匯博物院は館舎が落成した一八八三年から博物館の雛形を有するようになったことを説明し、徐家匯博物院が一九三三年に博物館として成立したことを主張する。よって徐家匯博物院は、一八七四創立の上海博物院より開設が遅れたことが理解できる。

第二章では、碑林に関する先行研究を日本人・中国人学者に分けて述べたうえで、現有する研究成果のもとで、碑林の歴史的沿革を表で明確にする。また前章で定義した近代的博物館が有すべき機能や要素という基準を用いて、一七七二年時点の碑林を考察する。その中で、一七七二年の大改修を行った畢沅が自ら著した『關中金石記』や『關中勝蹟圖志』、及び地方誌である『西安府志』と清末に碑林を訪れた日本人学者の文章を使用し、碑林は一七七二年から一七七八年の間にすでに博物館として機能していたことを証明する。すなわち、碑林はこの時期において、中国初の博物館であったのである。

【キーワード】 中国、博物館、濫觴、徐家匯博物院、碑林

はじめに

中国の博物館の濫觴は、イエズス会神父であったフランス人動植物学者のピエール・ウード（中国語名・韓伯禄、Pere Heude）が一八六八年に設立した「徐家匯博物院」⁽¹⁾であると、中国の博物館学界では一般に認識されている。

かかる濫觴説に対して、上海大学教授の呂建昌⁽²⁾や中央研究院歴史語言研究所副研究員の戴麗娟⁽³⁾は、徐家匯博物院は設立当初から長い間一般公開がされておらず、専用の建物も設けられていなかった点を明確にし、それは博物館としての基本機能を備えた施設でなかったことを指摘している。

筆者も従前より、徐家匯博物院が中国の博物館の嚆矢であるか否かについては、博物館の基本機能である「ヒト」と「モノ」はともかく、「非公開性」と「パ」である専用施設がないという両面から疑問を有していた。また、中国人が自ら建設した博物館は、一九〇五年に開設された南通博物院であると従来から考えられてきたが、尹侖⁽⁴⁾によって、中国人による中国初の博物館は一九〇一年に雲南府政府によって設立された雲南府博物館であるとする新説が提唱されている。

ところで、西安市に所在する西安碑林博物館は、著名な書法家の作品が刻まれた石碑資料を主に収蔵している博物館として広く名が知られている。碑文に関しては、金石学の範疇であるため宋時代からすでに研究がなされており、石碑の群體である碑林そのものの沿革も近年明確になりつつあるものの、碑林の性質についての定義は未だ不十分であり、改めて考察していきたい。

また、中日両国の博物館学の考え方を整合し、博物館として保有すべき条件について検討し、徐家匯博物院が中国の博物館の濫觴であるか否かを再検討した上で、先に考察した博物館の条件にもとづき、碑林の博物館的性質を見出

すことを目的とする。これによって、中国の博物館史・博物館学史の濫觴を指摘していきたい。

一 博物館の定義及び徐家匯博物院の創建年に関する考察

1 博物館の定義について

西洋から伝来した博物館学においては、紀元前二八〇年ごろに古代エジプトの首都であったアレクサンドリアに存在していたムセイオンが、世界的にみて博物館の濫觴であったとする。これに対し、中国の大学で考古学や博物館等の基本教材として使用されている『中国博物館学基礎』の編集長を務めた王宏均は、孔子が没した翌年の紀元前四七八年に、孔子が生前使用していた衣、冠、琴、書及び馬車等を陳列した、山東省曲阜市に所在した孔廟の方が、ムセイオンよりも時期的に早く、濫觴と称されるべきであると述べている⁵⁾。

この二つの施設のどちらが博物館の濫觴かという問題はさておき、どちらも現在「博物館」と呼称される施設、すなわち近代的博物館といえないのは事実である。これは両者とも、近代的博物館の基本的機能や要素を具備していないからである。つまり、施設が博物館であるか否かについては、その基本的機能や要素の有無が判断の基準であることは改めて述べるまでもない。

博物館の定義について日本を例とすると、博物館法の定義とICOM（国際博物館会議）による定義の二種が存在している。ICOMによる博物館の定義は、殊に博物館が非営利での常設的な展示を行い、恒久的な機関であるという点を強調しており、博物館法の第八条の「文部科学大臣は、博物館の健全な発達を図るために、博物館の設置及び運営上望ましい基準を定め、これを公表するものとする」という内容から、博物館法による定義は登録博物館

が準拠する望ましい形であると看取できよう。しかし、この二つの定義を現実にとれくらの博物館が満たしているかとなると、甚だ疑問であるといわざるをえない。現状では、博物館法に則っていない施設が、博物館と名乗っている例が数多く存在している。しかし、これらの施設を安易に博物館の範疇から除外するわけにはいかないので、それらを博物館と認定できるだけの機能や要素を再検討する必要がある。

博物館の基本的機能は、鶴田総一郎⁽⁶⁾によって定義された収集・整理保管・研究・教育普及の四つから、青木豊による収集・保存・研究・展示・教育の五つまで展開しており、さらに青木はこれらを基本・展開・応用と分類し、基本的機能を収集・保存・研究の三つと定めている⁽⁷⁾。これは青木が、今日の日本の博物館が停滞している現状を見据えた上で、上記の基本的三機能を有する施設を博物館とみなし得ると考えていることが窺われる。つまり、この基本的三機能を有する施設は、博物館の基本形を備えているとらえてよいだろう。

中国において、博物館の定義が法令上初めて明確にされたのは、一九七九年に国家文物局が公布した「省、市、自治区博物館工作条例」である。同法令は、博物館を文物と標本の主要収蔵機関・宣伝教育機関・科学研究機関と定義しており、中国では博物館の基本的機能を収蔵・教育・研究とらえていることが窺われる。当定義は、一九九〇年代に出版された博物館学事典である『中国大百科全書』の「博物館卷」に収録されている⁽⁸⁾が、その上二〇〇一年出版の『中国博物館学基礎』では、博物館に対し新たに近代的な意義が付加されている。それは、所蔵品、すなわち資料の所有・基本陳列であり、社会と公衆への一般公開、所蔵品の管理、社会教育の展開を行う専門職員の駐在といった四条件を備えた法に定められた永久性のある機関を博物館とする中国の考え方⁽⁹⁾である。

以上、中日両国における博物館機能の認識を合わせると、ある施設や機関が資料の収集・保存・研究・展示の四機能、及び社会への一般公開・専門職員の常駐・非営利性・常設性の四条件を有していれば、博物館であると定義して

もかまわないと考える。ここであえて教育機能を除外したのは、上記の青木が主張する通り、展示は教育の最大の具現化¹⁰であり、博物館教育は、資料に関する調査研究から得た成果を展示もしくは出版物の二種類の形を通じて、展示を見た人・出版物を読んだ人に資料の内蔵する情報を伝えるという流れでなければならぬからである。つまり筆者は、博物館教育はすでに展示に内包されていると考えている。

2 徐家匯博物院の創建年の真相

前述の通り、中国における博物館の濫觴は、徐家匯博物院と考えられている。この見解は、清末に中国へ赴いた西洋宣教師が著した記事に初出してから民国期を経て、今日に至るまで一〇〇年以上伝えられており、中国の学界において最も主流をなす見解となっている。そのため、二〇一八年の研究¹¹にいたっても、いまだにこの一説を定説として使用しているのが現状である。徐家匯博物院が中国博物館の濫觴ではないという事実は、現在でも周知されていないことが指摘できよう。

しかし先述したように、このことは呂建昌と戴麗娟によって、すでに論証されている。ただし戴の研究は、博物館の創建年についての内容が呂のそれとほぼ同じであり、かつ論述の重点がフランス宣教師による近代中国での自然史研究活動であるため、本稿においては主に前者の成果を基にして論考したい。

現在中国の学界ないし社会において、徐家匯博物院を博物館の濫觴と見なしている理由について、呂は二点言及している。その一つ目は、一九〇二年に当該博物館の創始者であったウッドが亡くなり、翌年博物館業務の後継者としてフレデリック・クルトゥワ（中国語名：柏永年、Frédéric Courtois S.J.）が清へ赴いたのち、クルトゥワによる「徐家匯博物館」と題された記事が一九二八年に発表され、その中に「此博物館係創於韓伯祿神父到上海以後、即西曆一

八六八年正月九日（この博物館は、ウード神父が上海に到着した後、すなわち西暦一八六八年一月九日に設立された）と記載されていることである。⁽¹²⁾つまり呂によれば、この博物館が一八六八年に設立されたという情報は、柏の翻訳文のみを通じて人々に伝わったと主張している。

第二の理由は、一九三九年に当該博物館の開設七〇周年記念大会が開催され、その後の新聞や雑誌等のメディアの報道を通して、博物館の創建年が一八六八年であることは、広く知られるようになり、社会において大きな反響も及ぼした⁽¹³⁾と指摘している。呂によると、一九三一年に徐家匯博物院は、同じくカトリック教会徐家匯本部に所属する震旦大学の所屬となると同時に震旦大学博物院と改名され、一九三三年に新たな館舎なる建物が建築された。一九三九年五月二〇日に院長であった昆虫学者のペール・ピール（中国語名：鄭璧爾、Père Piel）は、博物院開設七〇周年記念大会を開催した。元々当大会は一九三八年に挙行する計画であったが、戦争が原因で翌年に延期せざるを得なかったという。⁽¹⁴⁾

筆者は、呂がこの二つの理由の根拠としている記事を確認し、呂の主張には細かな点で誤りがあるものの、大枠では正確であると判断している。まず、第一の理由とする記事内容については、筆者が原文を確かめたところ、原文は、クルトゥワによってフランス語で書かれた「LE MUSEE DE ZI-KA-WEI」と、杜若城による中国語訳文の「徐家匯博物館」の二つの部分で構成されていることがわかった。クルトゥワによる原文は、⁽¹⁶⁾

On peut dire que le Musée est né le jour de l'arrivée à Changhai du Père Heude (韓伯祿) . le 9 Janvier 1868.

であり、情報が正確に伝達していない原因は、原作者であるクルトゥワではなく、訳者である杜が著したものであると筆者は判断している。すなわちクルトゥワの文章は、「博物館は、ピエール・ウード神父が上海に到着した日、即ち一八六八年一月九日以降に誕生した」と訳すべきであったと考える。なぜならその次の文には、ウード神父が翌月一

七日に船を用意し、科学の旅を始めた⁽¹⁷⁾と記載されているが、科学の旅とはウードによる動植物の採集や標本作りの仕事と看取され、ウードは上海に到着してから約一ヶ月半滞在した後、また中国各地へ旅立ったことから、この短期間で博物館を作ることには非常に無理があるといわざるを得ない。また、原文による「一月九日以降」という内容からして、この文章には博物館が成立した日付は明言されていないと考えられるが、前後の文脈からして、筆者の訳した方が整合性があると主張する。

震旦博物院の七〇周年記念大会の開催が報道され、それ以降博物館の創建年が一八六八年であることが、報道を通じて一般的に知られるようになった二つ目の理由であると、呂は主張している。しかし、呂がこの理由の根拠とした一九三九年五・六月出版の『自然界』に収録された「科学新聞・震旦博物院七十週年」という記事や、一九三九年前後の新聞や雑誌等々を筆者が確認したところ、確かにこの記事が発表された六月以降に七〇周年記念を取り上げた三つの記事があったものの、博物館の創建年に関しては以前から各雑誌や書籍等に記されており、呂が執着している博物館七〇周年の記念大会の開催に関わるものも、一九三八年の雑誌『科学』において発表されていることが確認できた。このため、呂が重視する一九三九年の記事が、社会に一定の注目をされる契機となったことは確かであるが、呂が主張しているような影響力はさほどなかったと筆者は判断している。実際、一九三九年前後に震旦博物院に関する記事は多数発表されており、その中に創建年を取り上げた記述のある新聞、雑誌または著書は、筆者が以下にまとめた通りである。

表1 震旦博物院(徐家匯博物院)の創建年に関する記述(筆者作成)

作者	時代	記事名(書籍名)	雑誌名(出版社)	記述内容
Frédéric Courtois (杜若城)	一九二八	『LE MUSEE DE ZI-KA-WEI』 (徐家匯博物館)	『自然界』 第三卷第二期 一四三―一五〇頁	一八六八年以降 (一四三頁、一四七頁)
	一九三〇	「近事・教中新聞・震旦大學新建博物院行奠基禮盛」	『聖教雜誌』 第一九卷第六期 二八四―二八六頁	一八七二年 (二八五頁)
張若谷	一九三五	「震旦大學院與博物院」	『時代』 第八卷第八期 一四―一五頁	一八六八年 (一五頁)
	一九三六	「震旦博物院概況」	『中國博物館協會會報』 第一卷第三期 二―一頁	一八六八年 (三三頁)
朱志鳴	一九三六	「震旦博物院」	『上海法租界納稅華人人會會報』 第一卷第一六期 三一―三頁	一八六八年 (三一―三頁)
費畊雨、 費鴻年	一九三六	『博物館學概論』	中華書局	一八七〇年前後 (二三頁)
	一九三六	『中國博物館一覽』	中國博物館協會	一八六八年 (七五頁)
	一九三七	「震旦博物院史略(上)」	『上海法租界納稅華人人會會報』 第二卷第五期 六七―六九頁	一八六八年 (六七頁)
	一九三八	「科学新聞・震旦大學博物院將舉行七十週年紀念」	『科学』 第二二卷第一一―一二期 五五―五七頁	一八六八年 (五五―五七頁)
	一九三九	「科学新聞・震旦博物院七十週年」	『科学』 第二三卷第五〇―六一期 三二八―三三〇頁	一八六八年 (三二八頁)
	一九三九	「韓氏博物院七十週年紀念」	『震旦医刊』 第四卷第四期 三二四―三二六頁、三二八―三二九頁	一九三九年で七十周年 と明記(三二八頁)

この表からも明らかであるように、徐家匯博物院の創建年についての記述のほとんどは、一八六八年を使用していることが理解できる。杜による「LE MUSÉE DE ZIKAWEI」の翻訳が、後のほとんどの記事に影響を与えていたことは呂の主張の通りである。しかしこのなかで、一九三〇年の『聖教雜誌』の「近事・教中新聞・震旦大學新建博物院行奠基禮誌盛」と題される記事では、一八七二年設立と記述しているが、何を根拠にしているのか新たな問題である。

呂が『聖教雜誌』について直接言及したことはないが、呂があげたウードと同じく、フランスイエズス会宣教師のジョセフ・セルヴィエール（中国語名：史式微、Joseph la Savierre）が著した『江南伝教史』¹⁸において、この点について説明している。同書には、一八七二年に徐家匯で開催された教会の会議で、江南科学委員会¹⁹の成立が決定し、委員会の主な四つの仕事が生計画され、その二つ目の仕事としてウードの指導の下で自然科学を研究し、徐家匯でウードが収集してきた資料を展示し、これをもって博物館を形成し、さらに博物館の研究成果を記録して上海で出版し、欧州へ伝える¹⁹という内容が記されている。呂が用いている『江南伝教史』は一八八三年に漢訳されたもので、筆者はフランス語の原書を査閲し、一九四頁の文章が上記内容と一致していることを確認した。²⁰つまり『聖教雜誌』が記載する一八七二年とは、博物館の設立が提案された年であり、この年を徐家匯博物院の創建年として見なしていることが推測できるのである。換言すれば、一八七二年に博物館の設立計画が開始されたことは、それ以前に当博物館は存在しなかったことを意味しているといえよう。

また表1で挙げた、中国の博物館学に関する初めての単行本として知られる『博物館學概論』では、作者の費畊雨・費鴻年は博物館の設立を一八七〇年前後としている。これも、呂が取り上げたもう一つの著書からその根拠が見つかった。前記した、江南科学委員会¹⁹の責任者の一人であるフランス宣教師のオーガスト・コロンベル（中国語名：高

龍聲 (Auguste M.Colombel) が一九〇〇年に出版した『Histoire de la mission du Kiang-nan』の第五巻には、徐家匯自然博物院の設立は前述した委員会の四つの仕事の中の二つ目として、一八七〇年にウード神父がすでに着手していると記載されている。この内容をウードが上海に到着してすぐに始めた活動と合わせると、資料の収集活動がこの時点ですでに始まっていたと考えられるからと思われる。

しかし残念ながら、コロンベル及びセルヴィエールによる二冊の著書が翻訳されたのは、両方とも近年の二、三〇年の間のことであるため、原書が出版された時期には徐家匯博物院の創建年に関する情報が普及できしておらず、多くの記事が一九二八年の杜若城による誤訳からの影響を受け、博物館が一八六八年に開設したと記述され続けてきた。ところで呂の考察⁽²²⁾で、徐家匯博物院の沿革に関して明らかにしている内容は、以下の通りである(表2)。

表2 徐家匯博物院の沿革(筆者作成)

年	活動内容
一八六八	ウード、徐家匯到着。後の博物館資料なる自然標本の収集を全国範囲で開始。
一八七二	徐家匯で江南科学委員会成立。博物館の開設が、決定される。
一八八三	専用館舎落成。動植物の自然標本を主に展示(午後から公開であり、無料であるが、入館時名刺が必要であり、案内人による誘導見学であった)。
一九三〇	所管は震旦大学へ。「震旦博物院」へ改名。
一九三三	新館舎落成。月々土曜日午後は一般公開(入館料あり、研究のための標本を提供している。毎年各国から研究のための来館者が多かった)。 ⁽²⁴⁾

ここで特記すべきは、博物館が開設された年代と、博物館として認められた時間が異なっている点である。実際、徐家匯博物院の創建年が明確に証明されていない現状では、一八六八年に徐家匯博物院が創建されたと論じられても、その時点で博物館機能が働いていなければ、博物館として認めてはいけないのである。

現在の博物館の名称は多種多様であり、博物院、陳列館、宝物館、ミュージアム等様々な博物館が存在している。つまり博物館にカテゴライズされる施設は、名称に定めがないことが特徴の一つであると言える。徐家匯博物院の場合、一八七二年の教会の会議で博物館の開設が決まり、その後しばらくして博物館が設立されたと推定することに無理はないと思われる。一方、徐家匯博物院の専用館舎が落成した一八八三年には、すでに資料の保存が行われていたと呂は指摘しているが、それは専用館舎ではなかったことから他の施設と併用された可能性も否定できない。徐家匯博物院が保存機能を正式に有するようになったのは、一八八三年以降であると判断できる。これにより、青木が提唱している博物館の基本的機能である収集・保存・研究という基準によると、一八八三年以降で徐家匯博物院は博物館の雛形を拵えていたと考えることができよう。

また、一八八三年の時点では、入館時に名刺の提示が必要とされていた。しかし当時の社会の実態を考えると、名刺を持っていない人が圧倒的に多く、そのため名刺が提示できないことから入館が許可されず、社会への一般公開という博物館の要件には反する状態であった。つまり、徐家匯博物院が博物館の前提条件をクリアしたのは一八八三年であるが、その時点ではまだ近代的博物館といえない状況であったと筆者は考えている。一八八三年は、上海の圓明園路（現虎丘路）で英国ロイヤル・アジアチック・ソサイアティーの北中国支会（North China Branch of the Royal Asiatic Society）が『上海博物院』を開設した年一八七四年より遅い。さらに徐家匯博物院は、何度も所属や所管が変化して、現在に至っている。

筆者は、徐家匯博物院を博物館として認めることができるのは、一九三三年であると考えられる。その理由は、当院が震旦大学の所管となったあと、昆虫学が専門の館長を迎えたことで専門職員が常駐し、新たな館舎が落成するとともに一般公開され、営利目的での入館料の徴収をせず、その他週六日開館して常設的な公開を行ったことに加え、元々保有していた資料の収集、保存、研究、展示機能を含めた先述の四機能・四要件を充足したのが一九三三年である考えるからである。

二 中国最古の博物館としての碑林

碑林は、陝西省西安市に所在する現在の西安碑林博物館の前身であり、学界では一〇八七年に転運使を務めた呂大忠が、碑林で最も早く主要な石碑である「石台孝経」⁽²⁷⁾や「開成石経」⁽²⁸⁾などを現在の地に移転し、整然と陳列を行った時点を、碑林の濫觴として認識している。西安碑林博物館館員の段志凌によると、碑林が設立され、現在の西安碑林博物館となるまでの長い期間、碑林は文廟や学校の一部、もしくは連携施設とみられていたため、名称については定まった呼称はなく、清代の文献や石碑に限ってみても、碑林の表記は「碑洞」をはじめ全部で四三種に達している⁽²⁹⁾という。また清代において、金石学は非常に盛んであったため、それに深い関わりのある碑林は中国国内だけでなく、日本まで知名度が広がっていた。それゆえ、清末及び民国期に中国を訪ねた日本人学者の多くは碑林を訪問し、その貴重な情報を記録している。

1 日本人学者による「碑林」の研究

中国において、最もよく知られている碑林に関する日本人の著書は、足立喜六が一九三三年に出版した『長安史蹟の研究』⁽³⁰⁾である。足立は一九〇六―一九一〇年の間、陝西高等学堂で教鞭を執っており、休暇を利用して西安周辺の漢・唐の帝王陵、寺院等々の古跡を実際に調査している。それによって作成された記録は、清末民初期の西安の古跡状況を理解する貴重な資料となっている。この書籍の第一三章「長安の古碑」には、碑林の沿革や実態、さらには碑文の内容までも詳細に記載されている。特に、足立が記した清末の碑林の実態や手書きの平面図は、碑林を研究するうえで避けては通れない存在であるといっても過言ではない。この書籍は二〇〇三年に中国語に翻訳され、『長安史蹟研究』⁽³²⁾として中国で出版されている。

関野貞及び常盤大定も、中国全国の史蹟を調査し、その記録をまとめて刊行し、世界へ中国の文化を伝えた日本の研究者である。関野・常盤による『支那佛教史蹟』⁽³³⁾・『支那文化史蹟』⁽³⁴⁾及び両方の評解は、貴重な写真は勿論のこと、文章においても中国各地の史蹟の情報を伝えており、大変意義深い。特に関野が一九〇六年に西安を訪れた際に撮影した写真のうち、碑林の陳列室の一景色は、管見の限り最も早いものであり、関野が一九三〇年に発表した「西安府文廟と碑林に於ける古碑」⁽³⁵⁾と題する文章は、中日両国において「碑林」を題材に書かれた最も古い文章である。

上記の学者たちと同じ時代に碑林を訪れた人物として、桑原隲蔵も忘れてはならない人物である。桑原は一九〇七―一九〇九年清末の中国に留学し、その日記をもとにまとめた一九四二年刊行の『考史遊記』⁽³⁶⁾に碑林に関する記述がある。桑原は、西安に到着した際に訪問した「日本人教習」⁽³⁷⁾について、下記の如く記している。

現在西安在住の日本人教習すべて八人。森・中澤・田中・鈴木・足立の五氏は皆東京高等師範學校出身にして(後略)

その中の足立は、上述の足立喜六であると容易に推測できよう。

これら以外に、一九八三年に出版された塚田康信による『西安碑林の研究』⁽³⁸⁾や近年になって山本謙治によって発表された「西安碑林博物館と館蔵碑誌装飾文様について」⁽³⁹⁾等の著書や論文も存在しており、日本人による碑林研究の熱意はまだまだ存続しているといえよう。

2 中国人学者による「碑林」の研究

一方中国では、碑林の主体である石碑は古くから金石学の研究材料として使用されてきた。一七七二年に実施した碑林の大規模な修繕・改造をはじめとして、清中期の陝西省内における様々な古蹟補修を行った陝西巡撫⁽⁴⁰⁾の畢沅によって編著された『關中金石記』⁽⁴¹⁾を筆頭に、近代になって中華人民共和国が成立してからは、とりわけ碑林に関する研究は続けられ、得られた成果を出版している事例は少なくない。

初めて碑林の歴史や沿革に焦点を当てたのは、陝西省博物館（一九五五年成立、表3）の館長を務めた武伯綸である。一九六一年に発表した「西安碑林簡史」は、中国における碑林の歴史に関する研究の嚆矢であるとされている。⁽⁴²⁾武は「西安碑林簡史」で、碑林の歴史を唐宋から現代まで整理しているが、前述の足立・関野の文章では触れられていない金・元代の碑林については、同様に明らかにされていない。後には王翰章の「碑林簡史」（一九八四年）や李域錚の「西安碑林」（一九八六年）などのように、武と同じような題名の研究も発表されているものの、「西安碑林簡史」を越える内容ではない。⁽⁴³⁾かかる事情に奮起した碑林博物館研究員の路遠は、一九九八年に学術的専門書である『西安碑林史』を完成させたが、従来不明であった金・元代の沿革についても明らかにするなど、現在碑林についての最も権威ある本となっている。この他、碑林博物館の館長であった趙力光が二〇〇二年に書いた「西安碑林歴史述略」

兼析西安碑林迁移「三次説」(西安碑林の歴史に関する略述—西安碑林「三転説」の分析)⁽⁴⁴⁾や吳崇山が二〇一四年に西安建築科技大学に提出した修士論文『碑林歴史街区再研究』⁽⁴⁵⁾等により、近年までの碑林の歴史や沿革に関する新たな研究成果が相次いで発表されている。これらの研究成果にもとづいて、碑林の歴史的沿革及び歴代における補修や保護の経緯をまとめたのが、以下の一覧表である。

表3 「碑林」の沿革及び歴代に亘る修繕・保護年表(筆者作成)

年代	実施者	具体的な内容・出自
七四五(唐)	玄宗皇帝李隆基(明皇)	「石台孝経」を唐長安城務本坊に所在する国子監 ⁽⁴⁶⁾ に設置。
八三七	国子監祭酒鄭覃	「開成石経」国子監に設置。
九〇四―九〇六	佑国軍節度使韓建	長安城を縮小(現西安城規模)。国子監が城外にあったため「石台孝経」を場内尚書省付近の文廟に移動。「重修文宣王廟記碑」より。
九〇九―九一四 (後梁)	永平軍節度使劉鄩	「開成石経」を文廟へ移動。「京兆府府学新移石経記碑」より。
九六二(宋)	永興軍節度使・京兆尹王彦超 ⁽⁴⁸⁾	文廟及びその中に設置された「開成石経」を修繕・修復。
一〇八〇	知永興軍府事(知府) 吕大防	現西安碑林博物館所在地付近へ文廟と一〇三五年設立の府学の一部を移動。 ⁽⁴⁹⁾
一〇八七	漕運使吕大忠	「開成石経」「石台孝経」及び他の石碑を府学の北側へ移動。以降所在地不変。碑林の濫觴 ⁽⁵⁰⁾
一一〇三	知永興軍府事虞策	府学を全て現所在地へ移動。文廟を修繕・改造し、府学・文廟・碑林の初歩的構成が成立。

一一六〇(金)	河中府同知府尹耶律隆、陝西東路 転運副使周維甫	文献上に記載された初修繕。「重修碑院七賢堂記碑」より。同文章には「碑院」と記載。
一二二五	参知政事・行省京兆完顔合達 ⁽⁵⁰⁾	修繕。「大金重修府学教養之碑」より。
一二五〇(元)	省幕僚王琛	一二三一年に京兆府は元の版図へ。王琛は金人に倒された一部の石碑を立てた。「類編長安志」より。
一二七〇ー一二七一	陝西行省平章政事サイイド・アジヤッル	文廟と共に修繕。「石台孝経」に楼亭、「開成石経」に簡易な小屋を建造。「大元国京兆府重修聖廟記碑」より。
一二七六	行省左右司員外郎徐公琰 ⁽⁵¹⁾	現在の文廟・碑林の建築の構成はこの時点で形成。「奉元路重修廟学記碑」より。
一二七七	諸学総管任佐 ⁽⁵²⁾	割れた石碑の修復、金末に倒れた石碑を立て直し、もとの様子へ。「重立文廟諸碑記」より。
一三三七	行御史台御史瞻思 ⁽⁵³⁾	石経が設置された回廊を修繕。「奉元路重修廟学記碑」より。
一三六五	陝西行省右丞韓元	元末の兵乱により破壊された文廟と共に完璧に修繕。「大元重修宣圣廟記碑」より。
一四七一(明)	長安、咸寧両県の県学も文廟付近へ移動。府学と合わせ、一廟三学の構成が成立。	
一四七三	陝西巡撫馬文昇等	文廟と共に修繕。石碑の陳列を調整。保護的建築を建造。「重修西安府学文廟記」より。
一五三〇	陝西巡撫劉天河、西安知府李文極	建築を補強。「西安府重修学廟之碑」より。碑文から「碑洞」の字が出現する。
一五八八	府学教授曹光啓等	一五五五年の大地震により倒れて割れた石碑を修復。明時代における最も重要な修繕。「重修孔廟石経記碑」「石墨鐫華」より。
一五九四	陝西巡撫劉光国等	文廟・三学・石経を修復。「重修儒学碑」より。
一六一八	欽差提督学校陝西等处提刑按察司副使梁鼎賢 ⁽⁵⁴⁾	「碑亭」を建造。規模を拡大。「重修廟学記碑」に出自。同年著された「石墨鐫華」には初めて「碑林」が名称として登場。

一六三六	巡撫陝西監察御史錢守廉	碑亭等を修繕。「重修文廟碑記」より。
一七二〇（清）	西安知府徐容	周囲に壁と柵を増設する。「重修碑亭記碑」より
一七七二	陝西巡撫畢沅	大規模な修繕。建築の改造、管理制度の制定、石碑の整理等。「關中金石記」「關中勝蹟圖志」等より
一八〇五	西安知府盛惇崇	碑林を修繕。石碑の陳列を調整。「重修西安府學碑林記碑」より。石碑において「碑林」が初登場。
一八四二	陝西巡撫富呢揚阿	小規模な修繕。「復修碑林記」より
一九一二（民国）	陝西省立図書館に管理されるように。	
一九一七	陝西省立図書館	建築を修繕。
一九三七―一九三八	整修西安碑林工程監修委員会、梁思成	建築と石碑の陳列を調整。全部で八陳列室、収蔵室等々を建造。同年西安碑林管理委員会が成立。
一九三九―一九四〇	西安碑林管理委員会	日本軍による空襲を防ぐため、「熹平石經」をはじめ重要な石碑の地下へ埋める作業を行う。
一九四四	陝西省歴史博物館は成立。文廟と共に当博物館の管理へ。	
一九四七	陝西省教育庁、陝西省歴史博物館等	陳列室を修繕。埋まっていた石碑を掘り出しに。
一九五〇（現中国）	文廟と共に西北歴史文物陳列館。のちに西北歴史博物館。	
一九五二	陝西省人民政府	陳列室、碑亭を修繕。石碑の陳列を調整。
一九五五	陝西省博物館へ改名	
一九五九	文廟は雷にあたり焼失。所在地は現碑林広場へ。	
一九七四	「開成石經」陳列室を全面的に修繕。	

一九七五	「石台孝経」を修復。当石碑の部分が接しているところから発見された紙幣等により「石台孝経」は一〇八七年現所在地へ移動されると以降同じ場所に安置。
一九七九	太和元氣坊、碑亭、陳列室等を修繕。地震対策。著名な石碑にガラス張り。
一九八二―一九八三	資料の増加により陳列室を新たに建造。石碑の移動。
一九八七	九〇〇周年記念。
一九九一	石碑、石刻、書法類文化財以外のものは全て、新たに落成した陝西歴史博物館へ。
一九九三	西安碑林博物館と改名。

3 博物館としての「碑林」

以上の表から碑林は、唐皇帝の命によって営造された石碑群が、宋代に現在の地へと移築されてから、代々西安地域を治めていた地方長官によって保護や修繕を受け、九〇〇年余りの時を経て、今日の西安碑林博物館が形作られてきた歴史的経緯が理解できる。

「碑林」という名称は、一六一八年に明の趙頡が著した、石碑を紹介した書籍『石墨鐫華』に初出しており、碑文においては「重修西安府学碑林記碑」で初めて使用されている。一方、「碑林」という名称が出現してからも、碑洞や碑院等と併用され続けており、「碑林」が定着するのは「重修西安府学碑林記碑」が建てられて以降のことである。⁽⁵⁶⁾

碑林の性質について路は、儒家經典を収蔵する石質の図書館であり、内容が豊富な歴史資料のデータベース、書法芸術の宝庫であると定義している。⁽⁵⁶⁾これらに加え、筆者は碑林を中国最古の博物館でもあったと主張したい。前述の通り、博物館はその名称が付けられていなくても、博物館としての機能や要件を満たしていれば、博物館と認定する

ことが可能である。よって以下では、碑林が何時頃から博物館としての体裁を有し始めたかについて検討する。

① 収集

碑林は、「石台孝経」や「開成石経」を中心として、時代が経るにつれて多数の石碑が収集されていった。『西安碑林史』には、碑林の主たる収集活動が記されており、収集の歴史的過程を把握することが出来る。碑林における初めての収集に関する明確な記載は、現西安碑林博物館が所蔵する顔真卿の「顔氏家廟碑」に認められる。この碑文には、「時太平興国七年八月二十九移」との刻字が遺存しており、九八二年に文廟へ移築・収集されて碑林の一部となったことが記されている。また九九三年には秦の李斯による「峯山刻石」が文廟で重刻され、一〇一〇年には「捫先茔記碑」及び「三墳記碑」が文廟で刻まれたことが判明している。

一〇八七年、「開成石経」及び「石台孝経」とともに府学の北側へ移築されたのは、「顔、褚、欧阳、徐、柳之書、下迨偏旁字源之类」であり、つまり顔真卿と褚遂良・欧阳詢・徐浩・柳公権の書法作品が刻まれた石碑、及び夢英による「篆書目錄偏旁字源碑」をはじめとする幾つかの石碑で、これらも碑林資料の一部となったことが知られる。これは碑林資料が継続して収集されていたことを示すもので、他にも宋代における金石学の勃興により、数多くの石碑が碑林へと集められていた。⁽⁵⁸⁾

その後、西安地域は金・元の版図となり、碑林資料の収集活動についての記載はみえなくなる。一方、元代の駱天驥による『類編長安志』には、金・元代の碑林に収蔵されている石碑は四一種、そのなかで新たに収集された石碑は宋代に建造された「興慶池禊宴詩碑」や「唐金蘭貼碑」等の四種、及び金・元代に新たに刻まれた「重修碑院七賢堂記碑」や「奉元路重修廟学記碑」等の九種⁽⁵⁹⁾であると記されている。

明代において、元代までに収集されていた六六種の石碑に加え、さらに唐碑七種・宋碑六種・明碑三〇種⁽⁶⁰⁾が収集さ

れている。清代は金石学の再興期であり、石碑だけでなく西安周辺に散乱していた大量の石質の資料が碑林へ運ばれ、清末頃になると資料の数は爆発的に増加していた。前述の足立は、「現今碑林に収蔵されて居る石碑はすべて六百六十七方ありといふ⁽⁶¹⁾」と証言しており、この数字は一九一四年出版の『図書館所管碑林碑目表』が公表した一七二種、八四七基⁽⁶²⁾というデータと大いに相違しているものの、後者の数字は石碑の他、墓誌・造像碑・石経等も含めたものと推測できよう。足立が書き残した六六七基という石碑の数は清末に統計されたものであり、清代における碑林資料の収蔵状況が窺われるものである。その時点から現在まで、碑林資料は出土等によって収集ますます増加しており、テーマごと、陳列室ごとに展示を行っているのが現状である。碑林における資料の収集は、創立から現在にいたるまで継続して行われているのである。

② 保存

表3で示したように、碑林は陝西省もしくは西安地域の地方長官によって補修・保存が行われてきた。保存行為の嚆矢は、一〇八七年に漕運使呂大忠によってなされたもので、当時の文廟が所在した環境が高湿度で石碑が泥土の中に埋まりやすく、十分な保護ができなかったため現在の地へ石碑群を移築したことである。その後、呂は建築物や回廊、碑亭も建造し、それ以降も歴代の地方長官が建物の補修や資料規模の増加に努めたが、碑林が専用建物を有するようになったのは一〇八七年のことであった。このことは、「京兆府府学新移石経記碑」の碑文に明確に刻まれている⁽⁶⁴⁾。

經始于元祐二年初秋、盡孟冬而落成。門序旁肩、双亭中峙、廊廡回環、不崇不卑、誠故都之壯觀、翰墨之淵藪也。
 (建物の建設は一〇八七年初秋から始まり、孟冬の終わり頃に建物が落成した。入り口は府学の横にあり、碑亭は屹立し、門廊は回っている。建物は整然としており、古都の大きく素晴らしい光景や翰墨の集まりの世界を実に

呈している。

この碑文は、『關中金石記』を著した畢を始め、足立や塚田を含む中日両国の研究者達が碑林の濫觴を説明する際に用いる史料であり、彼らが碑林に関する専用建物の創出を碑林の濫觴とみなしていたと看取できるのである。

③ 研究

宋代にはすでに、碑文を中心とする金石学の研究は開始されていたが、初めて碑林を研究対象とし、碑林資料の種類を明記したのは、元代の駱天驥が著した『類編長安志』第一〇卷「石刻」⁽⁶⁵⁾においてであった。しかし『類編長安志』では、石碑の所在を「文廟」とされ、碑林と結びつける記載は認められない。これは、表3で示したように、府学・文廟・碑林が一体化した構造が一〇三年に形成されており、殊に文廟と碑林は前後に隣接しているため、『類編長安志』が著された当時は碑林を文廟の一部とみなしていたとしても不思議ではなからう。換言すれば、駱天驥は碑林を独立した施設として認識していなかったことになり、『類編長安志』を碑林研究の始まりとはみなせないことになる。

明代の『石墨鐫華』には、石碑の所在を明記している内容も見受けられる。だが、この書籍の性格は全国の石碑を網羅する案内書であり、「自序」には「碑林」なる用語が初出しているものの、目録や本文では碑林のことを全て「西安府学」と呼称しており、この時期にいたっても府学・文廟・碑林は一体と認識されていたことが窺われる。一方、上述した畢沅が一七七八年に刊行した『關中勝蹟圖志』には、碑林に収蔵されている資料の目録が記載されており、石碑保存のための専用の建物を建築しようとしている内容が記載されている。⁽⁶⁶⁾

臣自莅任以后、每飭有司增亭建立、凡為風雨所侵、亦勿令有顛仆之患、回廊曲榭、挨次比肩、庶考古者、得以有所觀覽也。(私は、巡撫に着任してから常に官吏に碑亭等建物を増やすように命令しており、凡そ風や雨に侵食され、または顛仆する可能性のある石碑であれば保護する。このために建てた建物は数多く隣接している。遺物を

用いて歴史を研究する人ならば、これで建物の中で石碑等を観覧することができる。)

畢は自分の功績を述べながらも、碑林の建物を設営する目的が、石碑を研究する人々の便宜を図るためであったことを明記している。これは博物館が、博物館資料を研究する人々のための施設である点と、本質的に違いがないといえる。従って筆者は、畢が『關中勝蹟圖志』を刊行した一七七八年時点で、碑林に研究施設としての機能が保有されていたことを認め、博物館と化している根拠の一つとして捉えたい。

以上のことを踏まえ、私見では碑林研究の始まりを、同じく畢が一七八二年に刊行した『關中金石記』であると考える。この書籍は、關中地域全体を対象としているが、収録されている石碑の数も種類も清代の他の同類書籍を圧倒している。畢は金石学のみならず、経史・地理・方志学等の教養も身につけており、それによって各石碑の考察では、碑文に関する歴史的根拠を引用して論じている。つまり、従来の単なる石碑の所在を記述するだけの書籍とは、研究水準がはるかに違っているのである。それ故、『關中金石記』は貴重な学術的価値があるものとして、刊行当初から多くの学者に評価されている。⁶⁷⁾このような碑林に関わる記述は、碑林の陳列や保存のための建物を修繕・改造した一七七二年以降に記したものと筆者は推測している。なぜなら、畢沅が初めて碑林を見学した際に、碑林は「見屋宇傾圮、石経及諸碑率弃榛莽（建物が傾いており、開成石経や諸石碑は茂った草木に雑に放置されている）」⁶⁸⁾状態であったため、まず建物等の修繕を行ったと考えるからである。従って、碑林の研究機能は、一七七二年の修繕の完成から一七八二年の『關中金石記』の刊行までの間、すでに働いていたと考えられる。さらに絞ると、一七七八年の『關中勝蹟圖志』には碑林の目録が書き入れられているので、この時点で碑林の研究機能は有効であったといえよう。

以上を要するに、基本的機能のうちの三機能についての検証を通して、碑林は畢沅による保存施設の修繕・改造が完了した一七七二年に、博物館としての体裁をすでに整えていたと考えられるのである。

④ 展示

碑林は一〇八七年に現在の地へ移築されてから展示が行われており、具体的には次のように記されている。⁽⁶⁹⁾

開成石経分列東西次比而陳列焉、明皇注孝経及建学碑則立于中央、顔、褚、欧阳、徐、柳之書、下迨偏旁字源之類分布于庭之左右。(開成石経は左右に順次陳列され、石台孝経及び建学碑は中央に設置され、顔真卿、褚遂良、欧陽詢、徐浩、柳公権の書が刻まれた石碑、篆書目録偏旁字源碑は庭の左右に配置されている。)

この内容から、碑林はすでに宋代から室内と室外に区分して展示され、石碑は分類された上で意図的な配列に基づく展示がなされていたことがわかる。金代になると、碑林に初めての修繕が行われる。一二三一年から元軍の攻撃を受けた金の人々は、長安から逃げる際に石碑を倒したため、一二七七年に地方長官が碑林を元の状態に直すまでの間、展示はできなかつたと推察できる。次の元・明代においては、碑林の展示に関する記載は、発見されていない。その後、清代の『西安府志』第一九卷「學校志」において、一七七二年の大改修後の碑林の様子が明らかとなる。⁽⁷⁰⁾

乾隆壬辰、中丞畢公復新焉。陝甘資政録。西安郡學後舊有碑林、置唐宋以來石刻、歲久未修、牆宇傾圮、兼以俗工日事捶拓貞珉、將有日損之勢。余簡任封圻蒞止斯土、釋奠之始、議加改建、不一歲而工畢。爲堂五楹、恭奉我朝列聖、御書貞石、南爲敬一亭、又南建庭、並左右廊廡數十楹、砌置開成石経及宋元以前碑版、又南置石臺孝経、以上屋宇並周以闌楯、其鎖鑰有司掌之、帖估不得恣意摹榻、庶舊刻得以垂諸永久、至明代及近人碑刻、則汰存其佳者、別建三楹于敬一亭之西、爲之安置、兼以資搨工口食焉。(一七七二年、畢沅は碑林を再度復興させた。『陝甘資政録』によると、西安の府学の後ろに古くから碑林があり、唐・宋以来の石刻が置かれている。時が長く経つても碑林は修繕がなされず、壁や建物が傾いている。かつ日常的に下手に採拓されているため、日毎に壊れる傾向がある。私は巡撫に選ばれこの土地に到着し、府学で先師を祭る際に碑林の改修を検討し、一年足らずで工

事が終わった。清朝歴代の皇帝の御書が刻まれた石碑を設置するために五軒の建物を作っており、その南にある敬一亭のさらに南に庭並びに左右に回廊一〇数軒を設けて、開成石経及び宋・元以前の石碑の居場所を作成して設置し、またその南に石台孝経を配置した。これらのものを建物に入れる上、周りに柵で固め、建物の鍵は専門人員が管理する。これによって、勝手な採拓はできなくなり、古い石刻は後世に残すことができる。明時代及び清時代の石碑は、良いものだけ選び、敬一亭の西にまた建物三軒を建設して設置する。これを拓工の生計のため採拓させる。）

足立はまた、『長安史蹟の研究』⁽¹⁾で、以下の如く記している。

現在の碑林の設計や屋宇は畢沅當時の名残である。その後多少の修理を加へたこともあるが、乾隆時代の舊態はその儘に保持して居る。

つまり、足立が考察した際の碑林は、ほとんど畢沅が改修した時点のままであり、足立の記述から一七七二年の碑林では、足立が碑林を訪問した際と変わらない展示が行われていたと想定できるのである。換言すれば、足立による手書きの平面図(図1)は、自ら実見した碑林の様子を描いたものであるが、畢沅の改修時から変化はほとんど認められず、一七七二年以降の碑林の景観は変化することなく継承されていたことが判明する。さらに、関野が撮影した写真(図2)及び文廟・碑林全体の平面図(図3、4)は、より詳細に当時の展示を知ることができる資料である。

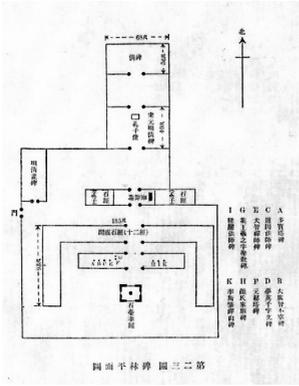


図1 碑林平面図
(註(28) 277頁より転載)



図2 1906年碑林の展示実景
(註(31) 第1輯36頁、註(32) 第9輯12頁、註(33) 5頁より転載)

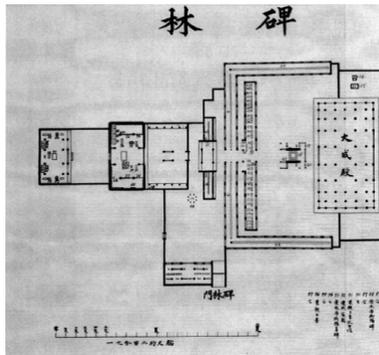


図3 関野による平面図碑林側(註(33) 9頁より転載)

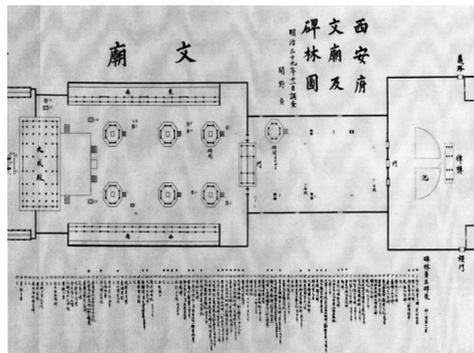


図4 関野による平面図碑林文廟全体(註(33) 10頁より転載)

碑林が何時から博物館としての要件を有していたかについては、畢沅が石碑を研究する人々のために、碑林の改修及び規模拡大を行ったことが重要である。畢沅の行為は、石碑資料を研究する人が自由に碑林を利用できるよう、資料を広く公開するという他にならなかった。

足立の記載からも、碑林の博物館機能を示す事例を見出すことができる。⁽⁷²⁾

碑林は陝西巡撫の直轄で、常に守衛を置いて之を看守して居る。冬期三ヶ月間は封鎖して開かないけれど、其の他は縦覧することが出来る。碑林内には常に七八人の職工が入りして古碑の拓本を作つて居り、碑林の門外には十數の翰墨堂即ち拓本店が軒を並べて、拓本を販賣して居る。

かかる内容から足立は、碑林は冬の三ヶ月を除いて見学できると明記しており、一般公開という要件と符合している。また畢は初めて碑林を訪れた際に、石碑が気ままに採拓されている情景を見て、保護のために勝手な採拓を禁止し、重要な石碑には柵を設置した。これはあくまで石碑を保護するための対策であり、一般公開を妨げるものではなかった。資料の保存を積極的に行つた行為であるといえよう。

先述した足立の『長安史蹟の研究』の記述内容を『西安府志』と対照させると、碑林には少なくとも非常勤館長である「巡撫」と警備の役割を担う「守衛」、建物や柵の鍵を管理する「司」及び拓本の販売で自給自足する「拓工」が存在していた。これは、専門職員の駐在という要件をクリアしている。『西安府志』によれば、拓本の販売は「拓工のため」と明記されていて限定的であり、また前掲したように「庶考古者、得以有所觀覽也」と明瞭に述べていることから、非営利的という点においても充足しているのである。

最後に常設性に関しては、表2のように一〇八七の創立から現代の博物館までの沿革をみると、戦乱や自己の要因で碑林の機能が喪失していた時期があったものの、総体的にはこれほど常設的な施設は世界的にみても珍しい。従っ

て、一七七二年に改修されて以降の碑林は、博物館が有すべき機能や要件をほとんど具備しており、『關中勝蹟圖志』が刊行された一七七八年までに、近代的博物館として生まれ変わったと想定していいのではなからうか。よって本稿では、この時点で碑林は中国最古の博物館として成立したのではないかと提唱したいと考える。

むすびにかえて

現在、中国では自国の博物館史・博物館学史に関する研究が盛んになされており、新たな事実が相次いで発見されている。近年、一部の学者が唱えている一八二九年設立の「マカオ大英博物館」が中国初の博物館であるという論説は、この一例である。本稿では、ことさらマカオ大英博物館に触れなかったが、機会を得て考究していく予定である。博物館学史の全体像に関しては、先学による研究成果を批判的に検証し、さらなる古い時代の博物館学発生に関する史実を確立する必要があると考えている。

本稿では、一旦中国最古の博物館を一七七二年頃に遡る結論を得たが、一般的に中国最古の博物館が設立されたと考えられている一八六八年とは、一〇〇年余の空白期が存在する。そのため、この間に他の博物館もしくは博物館機能を有した施設が存在したかどうかを確かめることが、次の課題と考える。本稿が、日本の博物館史・博物館学史の研究に幾ばくかの刺激を与えられるのなら、望外の喜びである。

註

(1) 開設当初は「Natural History Museum」「Musée de Zi-ka-wei」「Siccawei Museum」とも称される。一九三二年に震旦

大学の所属となり、創始者であるウードを記念するために「Musée Heude」(中国語名：震旦博物院)と改名した(「震旦博物院史略(上)」)『上海法租界納稅華人會會報』第二卷第五期、六七頁、一九三七年)。一九五三年中国科学院上海昆虫研究所の所属となり、二〇〇二年同院生命科学植物生理生態研究院へ編入され、二〇〇三年に上海昆虫博物館となった。

(2) 呂建昌「近代中国博物館史上需要澄清的一個問題——上海徐家匯博物院創建年代質疑」『上海文博論叢』二〇一一年第四期、六六一—七二頁、二〇一一年。

(3) 戴麗娟「從徐家匯博物院到震旦博物院——法国耶蘇會士在近代中国的自然史研究活動」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第八四本第二分、三二九—三八五頁、二〇一三年。

(4) 尹侖「法国人記錄的中国第一座博物館——雲南府博物館」『雲南檔案』二〇一七年一二期、四七一—四九頁、二〇一七年。

(5) 王宏均「博物館与社区历史文化 兼論世界最早的博物館和博物館起源」『中国博物館』一九九四年〇四期、四五—四七頁、一九九四年。

(6) 鶴田総一郎「博物館学総論」『博物館学入門』日本博物館協会、一九五六年。

(7) 布谷知夫「博物館の教育学習活動と展示との関係」『三重県総合博物館研究紀要』第一号、二頁、二〇一五年。

(8) 王宏均『中国博物館学基礎』上海古籍出版社、四〇頁、二〇〇一年。

(9) 註(8)に同じ、四二頁。

(10) 註(7)に同じ。

(11) 鄭瑞「中国博物館小史」『Museum study 明治大学学芸員養成課程紀要』二九、三六頁、二〇一八年、彭露「中国博物館学の濫觴と展開に関する研究」『國學院雑誌』第一一九卷第一〇号、一〇頁、二〇一八年。

(12) 註(2)に同じ、六九頁。

(13) 註(2)に同じ、七〇頁。

(14) 註(2)に同じ、六九頁。

(15) Frédéric Courtois, S.J., 著、杜若城訳「LE MUSÉE DE ZI-KA-WEI」『自然界』第三卷第二期、一四三—一五〇頁、一九二八年。

- (16) 註(15)と同じ、一四三頁。
- (17) 註(15)と同じ、一四三頁。
- (18) Joseph de la Servière著、天主教上海教区史料訳写組訳『江南伝教史』第二巻、上海訳文出版社、一九八三年。
- (19) 註(2)、六七頁。
- (20) Joseph de la Servière『HISTOIRE DE LA MISSION DU KIANG-NAN』Tome II Imprimerie de l'Orphelinat de Tou-se-wé、一九四頁、一九一四年。
- (21) Auguste McColombel『Histoire de la mission du Kiang-nan』Imprimerie de l'Orphelinat de Tou-se-wé、一九〇〇年。漢訳バージョンは、二〇〇九年輔仁大学が出版した『江南伝教史』である。
- (22) 註(2)と同じ、六八頁。
- (23) 註(2)と同じ、六九―七一頁。
- (24) 国幣二〇分である。(註(8)と同じ、九五頁)筆者による計算では現在の一〇〇円に相当する。
- (25) 註(2)と同じ、六九頁。
- (26) 主に唐・宋時代の重要な官職の一つである。漕運等で南部の物資を都城があつた北部に運輸する仕事が必要な任務であつたが、宋代には刑獄や財政等多くの地方行政に関わり、絶大な権力を持っていた。漕運使や漕司ともいう。
- (27) 玄宗皇帝が書き写した『孝経』に序と註解を加えた内容が刻まれた石碑に、後に肅宗皇帝となる太子が額をつけたもので、七四五年に完成した。石台の上に設置されたことから「石台孝経」と呼ばれている。現在、この石碑は碑林博物館の碑亭で野外展示されており、碑亭の扁額にある「碑林」の文字は、初めて「博物館」なる用語を使用した『四洲志』を編集した林則徐によるものである。
- (28) 八三〇年から八三七年にかけて、文宗皇帝の命令を受けた書法家の艾居晦や陳玠等が、楷書で書いた『易経』や『孝経』、『詩経』等々の一二経及び『九経字樣』『五経文字』が刻まれた石碑群のことである。完成は開成二年であることから、これらは「開成石経」と呼称されている。
- (29) 段志凌「清代碑石所見西安碑林称谓及其入藏碑林緣由―兼談「碑」字在清代碑刻中の写法」『碑林集刊』二〇一六年刊、

- 八一二二頁、二〇一六年。
- (30) 足立喜六『長安史蹟の研究』東洋文庫、一九三三年。
- (31) 現在西安に位置する西北大学の前身である。一八九六年設立。一九〇二年陝西大学堂。一九〇五年陝西高等学堂。一九二二年西北大学。
- (32) 足立喜六著、王双懷・淡懿誠・賈云訳『長安史迹研究』三秦出版社、二〇〇三年。
- (33) 常盤大定、関野貞『支那佛教史蹟』佛教史蹟研究会、一九二五年―一九二六年。
- (34) 常盤大定、関野貞『支那文化史蹟』法蔵館、一九三九年―一九四一年。
- (35) 関野貞『西安府文廟と碑林に於ける古碑』『書道全集』第八卷、平凡社、二一〇頁、一九三〇年。
- (36) 桑原隲蔵『考史遊記』弘文堂書房、一九四二年。
- (37) 註(36)に同じ、二八頁。
- (38) 塚田康信『西安碑林の研究』東方書店、一九八三年。
- (39) 山本謙治『西安碑林博物館と館蔵碑誌裝飾文様について』『阪南論集人文・自然科学編』第四卷第二号、二五―三六頁、二〇〇七年。
- (40) 清代に初めて設置された官職であり、陝西省の軍事・行政の長である。
- (41) 畢沅『關中金石記』、一七八二年。
- (42) 路遠『西安碑林史』西安出版社、一九二〇頁、一九九八年。
- (43) 註(42)に同じ、二〇―二二頁。
- (44) 趙力光『西安碑林歴史述略兼析西安碑林迁移』『三次説』『碑林集刊』二〇〇二年刊、一―一九頁、二〇〇二年。
- (45) 吳崇山『碑林歴史街区再研究』西安建築科技大学修士論文、二〇一四年。
- (46) 唐代の最高学府であり、教育行政管理機構でもあった。長官は祭酒という。日本からの留学生もここで学んでいた。
- (47) 唐代に初めて設置された地方軍の長官。唐の中期以降になると軍事だけでなく、地方の一区域を割拠するほどの勢力にまで増した。

- (48) 北宋代では、甘肅、陝西、河南及び山西の各一部を「永興軍路」と定め、長安を含んだ地域を京兆府と改名している。永興軍路の長官は永興軍路知府であり、京兆府のそれは京兆尹である。
- (49) 府級の学校及び教育管理機構の総称であり、通常は孔廟や文廟と一体となっている。
- (50) 元代に設置された平章政事、左右丞と同じく、中書省に属する参政官のこと。また、地方の行政機関を行省というが、行中書省の略称である。
- (51) 元代では中書省に属し、科挙に関わる官職である。
- (52) 府学、県学等の学校を合わせて管理する官職である。
- (53) 元代では中央で御史台が設置され、百官を監察する役目があった。
- (54) 省の監察及び司法を担当する官職である。ここでは、按察使以外に陝西等の省の教育機関の管理も兼務していたことがわかる。
- (55) 註(29)に同じ、一六頁。
- (56) 註(42)に同じ、一五―一六頁。
- (57) 註(42)に同じ、四八八―四九八頁。
- (58) 註(42)に同じ、七〇―八四頁。
- (59) 註(42)に同じ、一五七―一六〇頁。
- (60) 註(42)に同じ、二二三頁。
- (61) 註(30)に同じ、二七九頁。
- (62) 註(42)に同じ、二九二頁。
- (63) 其處窪下、霖潦衝注、隨立輒仆、埋沒腐壤、歲久折缺。(黎持「京兆府府学新移石經記碑」、一〇九〇年)
- (64) 註(63)に同じ
- (65) 註(42)に同じ、一五〇頁。
- (66) 畢沅『關中勝蹟圖志』第六卷、一七七八年。

- (67) 李向菲「畢沅『關中金石記』考論」『西部學刊』二〇一五年二期、三四―三五頁、二〇一五年。
- (68) 註(41)に同じ
- (69) 黎持「京兆府府学新移石經記碑」、一〇九〇年。
- (70) 舒其紳、嚴長明『西安府志』第一九卷、四庫全書、一七七九年。
- (71) 註(30)に同じ、二七八頁。
- (72) 註(30)に同じ、二七八―二七九頁。